

## 看護教育カリキュラムに関する和文献の検討

掛橋 千賀子 ・ 高橋 紀美子 ・ 西元 幸枝

**要旨** 少子・高齢化、医療の高度化など様々な社会の流れに伴い、看護に対する要請も変化している。看護基礎教育においても大学化や指定規則の一部改正など、よりニーズに沿うよう対応がなされている。それらを踏まえて本看護学科においても独自のカリキュラム構築に向けて検討を重ねている。今回、カリキュラムの研究の動向と課題を明らかにするために、看護教育カリキュラムに関する約10年間の和文献を中心に文献検索を行った。そして関連するテーマとして、看護教育カリキュラムの改正、看護基礎教育の大学化、看護の大学院教育、看護教育カリキュラムの編成の4点をあげ、関連文献を約170文献抽出し、テーマ別に概要をまとめリストを作成した。

**キーワード：**看護教育、看護教育の大学化、カリキュラム編成

### I. はじめに

少子・高齢化の進展、医療の高度化など、看護をとりまく環境の急速な変化に対応できるよう、看護基礎教育について検討が進められ、保健婦助産婦看護婦学校養成所指定規則の一部を改正する省令が公布され平成9年から施行された。今回の改正は、大学・短期大学設置基準の大綱化に準じた看護学教育の大学化を志向したものである。

本看護科においても、開学の次年度よりカリキュラムや実習のあり方についての研究グループを組織し検討を重ねている。そして平成7年には本看護学科における看護学実習の基本的な考え方と看護学実習全体の構造化の試案を提示することができた<sup>45)</sup>。この研究成果に基づき本学独自のカリキュラム構築に向けて更に検討を続けている。昨年はこの指定規則の改正と併せ、開学時からのカリキュラムの見直しを行い一部改正を行った。しかし指定規則の改正と時期的に併せなければならなかったことなど時間的な制約があり、今回の改正は部分的なものとならざるを得なかった。教育基本理念に基づいた独自のカリキュラム構築に向けさらに検討を重ねていかなければならない。まだその途上であるが、筆者らのグループは我が国におけるカリキュラムの研究の動向と課題を明らかにするために、看護教育カリキュ

ラムに関する約10年間の和文献レビューを行った。今回、カリキュラムを検討していくにあたり検索した文献を概要としてまとめ、リストを作成したので報告する。

### II. 文献検索について

文献は、医学中央雑誌CD-ROM版1988年～1997年より、キーワードを“看護教育”として検索した。医学中央雑誌以外の文献については、「日本看護関係雑誌文献集」第21～25巻（1988～1992）から、また「看護」巻末の「看護関係雑誌文献目録」（1988）、及び「最新看護索引」（1989～1996）の“看護教育”という見出しの中から、文献検索を行った。1988年からの文献を検索した理由は、1989年に保健婦助産婦看護婦学校養成所指定規則（以下指定規則という）の改正が行われたことに伴い、カリキュラム改正が大幅に実施されたため、その前年度より動向を把握する必要があると考えたからである。

検索したこれらの文献を、まず“看護の大学教育”という基軸で概観した。そして文献レビューによる約10年間の看護教育の動向のなかで、カリキュラム検討をしていくにあたり、関連が深いと考えられるテーマを4点あげ、文献を抽出していった。その結果、約170文献抽出することができた（資料参照）。そのテーマおよび選択理由は以下のとおりである。

### 1. 看護教育カリキュラムの改正

看護教育カリキュラムは、文部省、厚生省の合同省令である指定規則のなかに定められている教育課程を基本に編成されている。この指定規則は、看護職の国家試験受験資格を付与する事ができる、一定の水準を備えた学校及び養成所を指定する基準と手続きを定めたものであり、教育内容及び施設・設備・教員等の教育条件の水準確保という機能を果たしている。当然4年制大学、短期大学においても、看護職の養成機関であるならば指定規則で規定された枠組みの中での教育課程の編成が求められる。

この指定規則の改正が、1990（平成2）年と、1997（平成9）年に、過去にない早いテンポで行われた。その背景には、ここ数年の看護系大学や短期大学の急激な増加による看護教育の大学化が大きく影響している<sup>3)</sup>。

### 2. 看護基礎教育の大学化

日本における大学課程の看護教育は、1952年高知女子大学に看護学科が開学されたことに始まる。その翌年東京大学に開学された後ほぼ10年間は、この2校のままで、そして1991年までは11校時代が長く続いた。しかしその後テンポは急速し、92年に3校、93年には7校と毎年数大学が開校し、97年4月1日現在で56大学となった。これは最近の5年間にそれまで設置されていた数の約4倍の大学が一挙に新設されたことになる。その背景には日本看護協会が事業計画の中に重点事業としてあげている「看護基礎教育の大学化促進・一県一看護大学設置」があり、今後さらに増設が予測される。看護基礎教育を大学化する事の意義や期待、そして新設ラッシュへの危惧や疑問についての意見が文献には多くあった。あらためて大学化について考察することは意義深いと考える。

### 3. 看護の大学院教育

日本における初の看護系大学院（修士課程）は1979年千葉大学に、さらに翌年の1980年に聖路加看護大学に設置された。以後、現在まで本学を含め14大学に修士課程がある。また博士課程は現在5大学に開設されている。看護系大学の急増により大学卒業生も増加し、大学院への進学ニーズが高まりつつある現在、看護教育における大学院教育の必要性、役割などについて考察する必要がある。そしてカリキュラム編成においても学部教育と大学院教育

は体系づけ構造化していかなければならない。

### 4. 看護教育カリキュラムの編成

看護基礎教育の大学化と平成9年に実施されたカリキュラム改正に盛り込まれた大学教育の大綱化が相重り、カリキュラム開発への取り組みが益々盛んになることが予測される。それは指定規則と大学設置基準の要件を充たしつつ、個々の大学の理念や教育目標に沿った教育課程を編成することであり、本学科のこれからの検討課題でもある。他大学のカリキュラム構築の経緯を紹介したもの、及び研究的な取り組みなどから、カリキュラム編成及び研究の動向と課題について明らかにすることが必要である。

## Ⅲ. 文献の概要

### 1. 看護教育カリキュラムの改正に関するもの

#### 1) 文献の分類

看護教育カリキュラムの改正に関連する文献を、内容的側面からみていくと5つのカテゴリーに分類することが出来た。「改正カリキュラムの紹介やその意義に関するもの」、「改正カリキュラムの中心課題と方向性を指向するもの」、「改正カリキュラムの運用に関するもの」、「改正カリキュラムへの取り組みを実態調査したもの」、「看護教育制度に関するもの」であった。

#### 2) カリキュラム改正の経緯とねらい

人口の高齢化、医療の進歩に伴う医療内容の高度化、国民の健康に対する関心の高まりなど、保健医療をめぐる環境が多様化しつつある時代背景をふまえ、ニーズに対応できるよう資質の高い看護職者の養成確保と社会的地位の向上を図っていくことが必要とされ、平成2年に教育カリキュラムの改正（新カリキュラム）が実施された。それは看護婦課程については昭和42年、保健婦・助産婦課程については昭和46年、准看護婦課程にあっては昭和26年以来の大幅な改正となった<sup>2)</sup>。この新カリキュラムは、社会に求められる看護の役割は何かを見据え、看護学の確立を軸に、過密カリキュラムの改善や教育内容の精選等に主眼が当てられ、教科内容の調整が図られ、特に看護学校において積極的に実施された<sup>10)</sup>。

その後5年が経過し、さらに改正の動きが始まった。それを見据え行われた新カリキュラム評価報告によると、看護者としての職業意識を高め、大学教育やクリニカル・ナース・スペシャリスト(CNS)

への関心を強めたこと<sup>29)</sup>、看護学の体系を創り、それを教育の場に定着させた点は評価できる<sup>31)</sup>。しかし地域ケアや心の問題がこれまでになく重要視されている時代背景を考えると、精神面のケアや在宅ケアに関連する教科内容が不十分であること、さらに今後カリキュラムに組み入れる必要性を提言している<sup>5)</sup>。そして平成6年に出された「少子・高齢社会看護問題検討会」の提言を受け、次の改正に向けての動きは具体化し、平成9年4月から適用という方向性が出された。

一方、大学・短期大学における看護教育の改善に関しても、看護教育の発展・向上に資するため、大学及び短期大学設置基準の大綱化の趣旨を踏まえ、看護系大学・短期大学に適用される指定規則のあり方についての検討が重ねられ、平成7年に報告書が提出された。この中には、指定規則に従って大学・短期大学における教育課程を編成した場合の教育内容についての問題点があげられている。そして大学設置基準を生かすためには、各大学、短期大学の理念・目的に基づいた特色ある教育課程の編成がなされるよう、指定規則についての見直しが検討され具体策が示された。これは平成9年実施のカリキュラム改正の内容に大きく影響を与えた<sup>3)</sup>。そして“カリキュラム改正のねらい”の中で、「カリキュラムの弾力化」、「高学歴指向への対応」として明示され、教科目から教育内容の表示への変更、単位制の導入として具体化された<sup>18)</sup>。これによって指定規則は教育内容の水準確保という位置づけとして明確にされた。また各大学・短期大学は、カリキュラムの編成に当たっては、それぞれの大学の教育理念・目的を適切に反映させた柔軟な発想で、独自のものを創ることに意義があることが強調された。

## 2. 看護基礎教育の大学化に関するもの

### 1) 文献の分類

4年制の看護教育に関連する文献は、4つのカテゴリーに分類することができた。それは「大学の役割や特質に関するもの」、「4年制大学における看護教育のあり方に関するもの」、「大学基準協会の報告に関するもの」、「既設・新設大学の紹介に関するもの」であった。

### 2) 大学化の背景

南は<sup>95)</sup>、看護基礎教育の大学化の背景に、“看護

界を取り巻く環境（社会）の変化”と“看護界の内部の変化”を挙げている。まず環境の変化としては、社会が看護職に対して求める役割や機能に変化があったことである。またそれは看護の対象と場の拡大、対象者の価値観の変化にも起因している<sup>73)</sup>。看護界の内部の変化としては、学問としての看護学の発展や、臨床に活用できる高度な看護の知識が向上していることが伺えるため、その知識や技術を国民に還元出来るよう、卒後教育体制を設け、より充実していくこと。そしてその役割を大学が担うことが求められている点である。また社会における看護大学の役割について平山は<sup>83)</sup>、「看護大学教育は我が国の明確な社会目標となった大学作りであるだけに、看護学を社会との連携において発展させなくてはならず、それは地域社会の看護の需要に広く対応すべきであることを意味している」と述べている。

### 3) 大学教育の目ざすもの

現在看護系の大学が、“看護教育の平成の改革”と言われるほど急速に増加している。そのような折り“看護学の大学教育のあり方”について報告書が発表された<sup>56)</sup> <sup>84)</sup>。そのなかには、設置後の大学が自己の努力によって改善充実していくための「向上基準」が14項目として具体的に示されている。そしてまた4年間を一貫させた整合性ある教育課程として編成すべきこと、専門的授業科目は、看護学を最も効率的に伝えるために体系的に整えていくこと、そのためには看護学にふさわしい教育研究の環境づくりや、学術的国際交流の必要性について言及してある。この向上基準について濱田は<sup>74)</sup>、「看護学の質的向上を図る道しるべであり、既存の大学の自己評価・見直し、教育改革の方向のために大きな役割を果たすものと言える」と評価している。

### 4) 大学における教育

#### (1) プロフェッショナルとしての教育

樋口は<sup>77)</sup>、プロフェッショナルとしての教育は、「単なる手先の技術を見よう見まねで画一的に徒弟的に教えていくのではなく、看護の対象者一人一人に、その技術がなぜ大切なのか、どのように必要なのか、どんな方法を用いればその人のニーズを適切に満たすことができるかを考えながら行動できるように教育していくことである」と述べている。それにはすぐに何かが出来るという即戦力を付けることを目標とするのではなく、自己啓発ができるための

基礎的な学びに重点を置かなければならない。将来、自立性のある職業人として社会の変化に対応でき、自己啓発していける人を育てることこそ大学教育の目的であると言える<sup>73)</sup>。

#### (2) 人間理解の場

大学教育では、一般教養科目の選択の幅が多く、専門科目と体系的な学習ができる環境にある。また学問、研究の自由も存在する。看護は、個々の人間を生物学的、心理・社会的に理解していくことから始まる<sup>73)</sup>。幅広い体系づけられた学習を通して、社会や人間、つまり多面的で統合的な存在である複雑な人間について理解を深め、加えて科学的な思考と幅のある考え方などが養われていくことが期待できる<sup>70)</sup>。

#### (3) 統合的ケアについての学習

これまでの専門学校を中心にした看護教育は、看護婦教育課程を土台にし保健婦教育、助産婦教育に分かれ行われていた。このように看護教育が3種類の資格で分立されては全人的医療を全うすることは不可能であり、保健・助産・看護は一元化してこそ、真の看護となりうる<sup>33)</sup>。この点が平成9年の改正カリキュラムでも検討され、「統合カリキュラムに係る指定基準の特例」<sup>9)</sup>として提示された。それによって統合カリキュラム、すなわち保健婦学校養成所と看護婦学校養成所、又は助産婦学校養成所と看護婦学校養成所の指定を併せ受け教育を行う場合の単位数などに特例が示された。またこれらは看護を包括的に学習するには、最低4年間が必要なことも指し示している。現在の大学教育では、看護婦課程と保健婦課程の両方の教育課程を統合したカリキュラム編成が行われているところがほとんどである。それは健康のすべてのレベル、すべての場、状況にあったケアが出来るようになることを目標としたものである。このような健康から疾病そして死までの保健・医療・福祉の全体的システムの学習をとおして、健康のあらゆる問題に対して看護の視点で総合的調整機能を果たすことが可能となる<sup>73)</sup>。

#### 5) 大学教育の死角

急速な看護基礎教育の大学化に伴い生じた事態を懸念した文献もあった。それは看護教育者不足により地方がかかえる人材偏重の問題<sup>62)</sup>、生きた看護教育をするための教員の採用基準についての意見<sup>60)</sup>、高校教師からの看護教育への疑問<sup>63)</sup> などであった。

急速な大学化に伴い生じた歪みについてそれぞれの立場から指摘したものであり、現況を反映したものでもある。今こそ原点に帰り、「看護とは何か」「何をしようとしているのか」「どのように教育をしようとしているのか」など問い直し、また今後も問い続けていかなければならない課題でもある<sup>62)</sup>。

### 3. 看護の大学院教育に関するもの

#### 1) 文献の分類

看護の大学院教育に関連する文献は、5つのカテゴリーに分類することができた。「大学院教育の意義や必要性に関するもの」、「既設・新設の大学院の紹介に関するもの」、「外国の大学院教育の現状と課題に関するもの」、「大学院教育のあり方に関するもの」、「大学院教育のニーズに関する調査報告」であった。

#### 2) 大学院教育の意義及び必要性

大学院研究科の設置の目的には<sup>7)</sup>、①研究者の養成、並びに高等教育機関における看護学専攻の教員の養成、②専門性の高いケアを行う看護職(CNS等)と保健医療福祉で活躍する看護職の育成、③国際協力に貢献できる人材の育成等がある。これは大学院教育は、教育・研究者とスペシャリストの両方の人材育成を志向したものであることを示している。現在看護系の大学院は14校あり、まだ大学院教育は緒に就いたばかりであると言える。今後社会のニーズに沿えるよういかに質的にも量的にも充足できるよう役割を果たしていくかということは大きな課題となる<sup>111)</sup>。そのためには、教育課程の中で何をコアにし、ユニーク性をどう打ち出していくかなど、カリキュラム編成の面での検討も重要である。今後大学卒業生の受け入れとして大学院の急増が予測される。急激な大学化に伴う人材の歪みが論議されている現在<sup>62)</sup>、看護学教育者の不足や学術研究体制のおくれなど深刻な問題に発展することも考えられる。しかしそれは発展途上における通過点としてとらえ、大学院教育の充実というさらなる発展を目標にすることが重要である。杉森は<sup>118)</sup>、大学院教育の実現が遅れてきた原因として、看護の実践活動が理論的根拠を構成する科学的知識として伝承されなかったこと、その背景には看護教育の閉鎖的な構造があったことを挙げている。そしてこの状況を改革するには、どの職業においてもそうであったよう



に、教育の力によることが改革方法の一つであり、それには研究をすること等の役割を持つ大学院課程の実現が重要な意味を持つとしている。

#### 4. 看護教育カリキュラムの編成に関するもの

##### 1) 文献の概要

看護教育のカリキュラム編成に関連する文献は3つのカテゴリーに分類することができた。それは「カリキュラム作成に関するもの」「既設・新設の大学のカリキュラムの紹介に関するもの」「カリキュラム研究に関するもの」であった。全体的にカリキュラム作成に関連する文献は少なく、新設大学のカリキュラム作成の経緯や内容を紹介したものが圧倒的に多かった。

##### 2) カリキュラム編成について

カリキュラム編成に関しては、「看護教育カリキュラムその作成過程」<sup>139)</sup>のなかに、カリキュラム作成過程の4つの段階、すなわち(1)方向づけの段階(2)形成段階(3)機能段階(4)評価段階についてまとめられ、それぞれの段階の構成要素が示されている。またこの訳者である小山の文献<sup>151)</sup>には、カリキュラム作成過程の全体像としての概略が示されている。

カリキュラム作成過程の中でカリキュラム評価は非常に重要であり、よりよい教育の進めていく上で不可欠な要素である。しかしカリキュラム評価についての理論や研究の方法論に関連する文献は少なかった。その中で宮岡<sup>169)</sup> 170) は、カリキュラム評価において先導的役割を果たしていると思われるアメリカにおける1970年以降に発表された研究について文献検索を行い、抽出した文献を分類し、カリキュラム評価の必要性を述べている。そしてわが国のカリキュラム研究の遅れは、看護の高等教育プログラムの評価基準が明確にされていない点にあると指摘している。その他、雄西による文献<sup>141)</sup>があるが、アラバマ大学看護学部のカリキュラムと教育の実際について報告した中で、カリキュラム評価システムについて紹介をしている。

本研究のために検索した文献中、実際にこれらの評価基準によってカリキュラムを分析した研究はみられないが、カリキュラム編成を研究的に発展させてきた大学の報告はあった<sup>161)</sup> 162) 163)。

3) 大学創設時におけるカリキュラム作成の報告  
看護系大学の創設ラッシュに伴い、それぞれの大

学の開学の背景、基本理念、カリキュラム作成の経緯などを紹介した文献が多い。看護雑誌「Quality Nursing」の中でも“転換期の看護教育”と題し特集が組まれている。その中には10数校の新設大学の具体的な教育理念、カリキュラム展開などが紹介されていた(資料参照)。それらの内容からはそれぞれの大学が看護をどうとらえ、どのように理論的に学生に伝えていこうとしているかが伝わってくる。また河野は<sup>150)</sup>、「学校側が理想的な教育理念や方針を掲げていても、これらを受け止める学生がこの学校に入学して本当によかったと感じなければ何の作用も及ぼさない」と、理念が形骸化することなく学生を視野に入れ、期待する大学教育を常に志向することの必要性を述べている。

現在、我が国の大学教育の在り方が見直され、他分野では学科の新・増設が制約されるなど幅広い改革がなされている。しかし看護学は大学化を志向し発展の機会を得ている。今後看護の大学教育が社会の投資に値する組織体であることが問われることを覚悟し、大学化の真の意味を見失わないよう確実に発展していくことが望まれる<sup>84)</sup>。

#### おわりに

看護に対する時代の要請の変化が著しいなか、看護教育の動向に大きな流れがあったことを、和文献のレビューをとおして改めて確認することができた。文献の多くは特集を組まれた中からの抽出であり、トピック的な内容が多かった。それは看護を取り巻く環境が大きく変化しており、看護職全体がその中で方向性を模索し、社会的使命を有効的に遂行できるよう取り組んでいる現状を表しているとも言える。今後、看護学をより充実させていくための方法の一つとして、カリキュラム開発に関する研究的な取り組みが盛んになることが求められている。

#### 付記

本研究は、1995年度岡山県立大学特別研究の助成を受け行われた「当看護学科のカリキュラム改訂に関する調査研究」の一部をまとめたものである。

## V. テーマ別文献一覧（引用・参考文献を含む）

### 1. 看護教育カリキュラム改正に関する文献

- 1) 青木康子他(1989). 新しい看護婦教育カリキュラム、看護教育、30(6):322-361.
- 2) 青木康子(1993). 新カリキュラムの実践に対する期待とジレンマ、看護教育、34(6):411-416.
- 3) 青木康子(1996). 新しい教育カリキュラムの評価と展望、看護、48(10):32-41.
- 4) 荒井蝶子他(1996). 新しい統合カリキュラムの構築、Quality Nursing、2(3):180-190.
- 5) 神郡博(1996). 新カリキュラムに対する評価、Quality Nursing、2(2):114-119.
- 6) 楠本万里子他(1989). 看護教育課程改正について一助産婦課程の改正内容・保健婦課程の改正内容、保健の科学、31(9):596-601.
- 7) 大学基準協会(1996). 看護学教育に関する基準一大学基準資料43号一、看護教育、37(2):130-133.
- 8) 看護教育制度研究会(1995). わかりやすい看護教育制度(第2版)、廣川書店.
- 9) 厚生省健康政策局(1996). 保健婦助産婦看護婦養成所指定規則等の改正の概要、資料1.
- 10) 小山眞里子他(1990). 改正されたカリキュラムに対する看護基礎教育機関の取り組み、日本看護科学学会誌、10(3):52-53.
- 11) 小山眞里子他(1994). 新カリキュラム開始時における看護基礎教育機関の取り組み、日本看護学教育学会誌、4(1):35-50.
- 12) 杉野佳江他(1990). ゆとりに期待するもの、看護、42(13):30-66.
- 13) 杉村みどり(1990). カリキュラム改正とこれからの看護教育、看護教育、31(1):8-23.
- 14) 桜庭繁(1989). カリキュラムに関する指導要項から、精神科看護、29:73-77.
- 15) 鈴木良子他(1993). 小児看護学カリキュラム編成、看護教育、34(7):500-506.
- 16) 関根龍子(1989). 看護婦教育カリキュラム改正について、保健の科学、31(2):123-124.
- 17) 関根龍子(1990). 保健婦助産婦看護婦等のカリキュラムの改正について、日本看護学校協議会雑誌、20(1):5-22.
- 18) 関根龍子(1996). 新しいカリキュラムにどう対応するか、看護教育、37(10):815-824.

- 19) 常葉恵子(1992). カリキュラムの改正を踏まえて看護教育の方向性を探る、看護、44(13):80-85.
- 20) 豊島豊子(1989). 新しい助産婦教育カリキュラム、看護教育、30(6):344-351.
- 21) 日本看護協会現行カリキュラム検討委員会(1994). 現行カリキュラム検討委員会報告(その1)、看護、46(10):159-167.
- 22) 日本看護学校協議会編(1994). 最新看護学教育ガイドンス、医歯薬出版株式会社.
- 23) 平山朝子他(1989). 新しい保健婦教育カリキュラム、看護教育、30(6):322-343.
- 24) 平山朝子他(1989). 新カリキュラムとこれからの保健婦教育、保健婦雑誌、45(9):762-777.
- 25) 藤村龍子(1993). カリキュラム今後の動向一中心課題と大学化について一、看護教育、34(7):491-499.
- 26) 丸山美知子(1989). 保健婦教育課程の改正・そのねらいと理解を深めるために、保健同人生活教育、33(11):40-55.
- 27) 宮崎徳子(1990). カリキュラム改正と看護教育、日本病院会誌、37(7):1039-1044.
- 28) 村田恵子(1990). 学習者中心の自己成長を育む教育を一学ぶ人の観点から見た看護教育カリキュラム改正の意義一、看護教育、31(7):388-395.
- 29) 森田チエコ他(1996). 新カリキュラム改正に伴う看護界の反応、Quality Nursing、2(2):120-127.
- 30) 矢田真美子(1990). 方向づけの定まった一貫したカリキュラムを、看護教育、31(7):397-401.
- 31) 山口瑞穂子(1996). 新カリキュラムを考える、Quality Nursing、2(2):107-113.
- 32) 山田里津(1989). 新カリキュラムに求められるものは何か、日本看護学校協議会雑誌、20(1):69-75.
- 33) 山田里津(1997). 統合カリキュラム、看護展望、22(2):170-176.

以上33文献

### 2. 看護の大学教育に関する文献

- 34) 石塚百合子(1997). 札幌医科大学保健医学部における科目履修生受け入れの現状、Quality Nursing、3(7):33-40.
- 35) 飯塚京子他(1993). 科目等履修生制度を利用して、Quality Nursing、3(7):24-32.
- 36) 稲尾公子(1997). 看護学の学士号の価値を見出し看護部として支援する、Quality Nursing、3(7):11-16.
- 37) 稲本一夫他(1990). 米国の保健管理・医療情報関連の4

- 年制教育、病院管理、27(3):257-262.
- 38) 氏家幸子(1994). 大学教育の目指すもの—大阪府立看護大学の開設準備過程、看護教育、35 (10):763-767.
- 39) 内海滉(1989). 大学でなければならない教育とは何か、看護展望、14(10):1089-1093.
- 40) 梅津薫他(1992). 大学で看護を学ぶ学生の4年間での変容とアイデンティティ形成過程についての一考察、第23回日本看護学会集録(看護教育)、146-148.
- 41) 大賀明子(1990). 看護系大学編入学の実態と看護教育制度、看護教育、31(1):53-59.
- 42) 大久保薫(1996). 臨床現場は大学教育に何を期待し、どう連携していくか、インターナショナルナッシングレビュー、19(2):21-24.
- 43) 大関信子(1996). 看護大学に期待するもの—患者の立場から、Quality Nursing、2(8):716-722.
- 44) 大西俊造(1994). 大学教育の目指すもの—大阪大学医学部保健学科看護学専攻の開設準備過程、看護教育、35(10):778-783.
- 45) 奥井幸子他(1995). 大学教育における看護学実習のあり方に関する考察、岡山県立大学保健福祉学部看護学科特別研究報告書、1-64.
- 46) 奥村元子(1994). 大学教育の目指すもの—最近10年間の看護系大学卒業者の就業状況、看護教育、35(10):784-787.
- 47) 大屋律子(1991). 行政の立場から見た4年制看護大学、看護教育、32(3):148-150.
- 48) 菊井和子(1995). 大学制度看護教育課程の構想、川崎医療福祉学会誌、5(2):25-32.
- 49) 河野伸造他(1997). 琉球大学医学部保健学科における科目履修制度、Quality Nursing、3(7):41-44.
- 50) 国立大学医療技術短期大学部看護学科連絡協議会・カリキュラム委員会(1992). 国立大学医療技術短期大学部看護学科大学化に関する意識調査、看護、44(7):178-188.
- 51) 小島通代(1995). 大学でなければならない教育、看護展望、20(5):452-546.
- 52) 小西美智子(1993). 医学部保健学科の看護教育—広島大学の場合、看護研究、26(7):611-614.
- 53) 小林敬治(1989). 行政として短大・大学で目指しているもの、看護展望、14(10):1097-1098.
- 54) 小玉香津子(1995). 大学課程看護教育の進展、看護、47(15):73-77.
- 55) 小山真理子(1994). 看護系大学の学生が卒業時に修得していることを期待される能力、日本看護科学学会誌、14(3):366-367.
- 56) 財団法人大学基準協会(1994). 21世紀の看護教育—基準の設定に向けて、看護学教育研究委員会報告書、大学基準協会資料第41号.
- 57) 佐々木光雄他(1996). 看護大学の歩み—熊本大学教育学部教員養成過程、Quality Nursing、2(3):243-250.
- 58) 佐藤紀子(1994). 大学教育に対する期待と不安—看護の大学教育と専門学校教育の相違、看護教育、35(11):859-862.
- 59) 佐藤禮子(1994). 将来、指導的役割を担う人材の育成、看護教育、35(10):744-746.
- 60) 杉本正子(1996). 看護の大学教育の死角、看護教育、37(7):530-533.
- 61) 鈴木恵美子(1991). 看護教育の4年制大学化の必要性と阻害因子について、看護教育、32(3):134-137.
- 62) 千田サダ子(1996). 看護の大学教育の死角、看護教育、37(7):525-529.
- 63) 田口正男(1996). 看護大学への疑問、看護教育、37(7):520-524.
- 64) 竹尾恵子他(1993). カリキュラムから見た看護大学教育、看護研究、26(7):576-602.
- 65) 土屋純(1991). 医学教育から見た看護教育、看護教育、32(3):141-144.
- 66) 筒井真優美(1993). ニューヨーク大学看護学部の概要とカリキュラム、看護研究、26(7):585-594.
- 67) 徳満豊(1994). 大学教育の目指すもの—鹿児島純心女子大学看護学部の開設準備過程、看護教育、35(10):768-772.
- 68) 常葉恵子他(1992). 米国大学看護学部におけるカリキュラムおよび看護技術教育、聖路加看護大学紀要、18:54-73.
- 69) 永井敏枝(1988). 生命の科学を中心とした総合大学における看護教育—北里大学看護学部における看護教育、看護教育、29(8):476-483.
- 70) 長浦レイコ(1991). 4年制大学における看護教育、看護教育、32(2):137-140.
- 71) 野尻貞子他(1988). 保健学の中での幅広い視野からの看護教育—琉球大学医学部保健学科における看護教育、看護教育、29(8):462-468.
- 72) 野島佐由美他(1993). 英国における看護教育、看護研

- 究、26(7):595-602.
- 73) 波多野梗子(1996). これからの看護のあり方と看護教育—大学卒看護職に期待されるもの、看護展望、21(11):1282-1289.
- 74) 濱田悦子(1995). 看護大学新たな展開—看護学教員の養成と再教育の意義、Quality Nursing、1(2):16-23.
- 75) 東雍(1991). 医療科学の一分野としての看護学、看護教育、32(3):145-147.
- 76) 樋口康子(1988). 看護の専門家を育成する基礎教育—日本赤十字看護大学における看護教育、看護教育、29(8):454-461.
- 77) 樋口康子(1989). 大学でなければ出来ない教育とは何か、看護展望、14(10):22-24.
- 78) 樋口康子(1996). 私学における看護教育の課題と展望—大学教育の課題と展望、看護教育、37(3):186-187.
- 79) 平河勝美(1997). 編入学制度の運用と教育内容に求められるもの、Quality Nursing、3(7):17-23.
- 80) 平野和恵(1994). 大学卒業看護婦の意識調査、日本看護科学学会25回集録、55-57.
- 81) 平澤美恵子(1992). 学士課程における助産学教育の実態について、看護教育、33(5):336-341.
- 82) 平澤美恵子(1992). 助産婦教育に求められるもの—大学における助産婦教育、ペリネイタルケア、11(12):1019-1024.
- 83) 平山朝子(1993). 看護学の大学教育、看護研究、26(7):2-3.
- 84) 平山朝子(1994). 大学基準協会看護学教育研究委員会報告の紹介、看護教育、35(11):870-873.
- 85) 平山朝子(1995). 大学教育課程における地域看護学の位置づけ、Quality Nursing、1(10):4-9.
- 86) 舟島なをみ他(1996). 諸外国における看護養成教育大学化への促進要因及び阻害要因の検討、千葉大学看護学部紀要、18:37-45.
- 87) 舟島なをみ(1996). 社会人特別選抜による学士看護婦養成コース開発に関する研究、第27回日本看護学会集録(看護教育)、139-141.
- 88) 藤原宰江他(1989). 保健婦助産婦看護婦の統合教育を目標としたカリキュラム検討—大学教育の必然性をめぐって、岡山県立短期大学研究紀要、32(2):44-60.
- 89) 藤原宰江他(1989). 保健婦助産婦看護婦の統合教育を目標としたカリキュラム検討—指導上の重点課題、岡山県立短期大学研究紀要、32(2):61-71.
- 90) 堀原一(1993). 看護教育の改革、看護教育、34(1):29-33.
- 91) 町田トシエ(1994). 大学教育の目指すもの—大分医科大学医学部看護学科の開設準備過程、看護教育、35(10):773-777.
- 92) 松岡緑(1994). 大学教育の目指すもの—人間中心の医療を目指して、看護教育、35(10):760-762.
- 93) 丸山知子(1994). 看護教育の目指すもの—積極的に学び創造的に行動できる基盤作り、看護教育、35(10):737-740.
- 94) 三木福治郎(1991). なぜ4年制大学なのか、看護教育、32(3):158-168.
- 95) 南裕子(1994). 「今なぜ大学教育なのか」に改めて応える、看護教育、35(10):744-746.
- 96) 宮子あずさ(1994). 大学教育に対する期待と不安、看護教育、35(11):866-869.
- 97) 深山智代(1993). 看護福祉学部における看護教育課程、看護研究、26(7):603-610.
- 98) 村田恵子他(1990). 総合大学看護学部カリキュラム作成、看護教育、31(7):402-405.
- 99) 山崎智子(1988). さらに充実した専門看護職の教育を目指す—高知女子大学における看護教育、看護教育、29(8):454-461.
- 100) 吉田滋子(1989). 看護における大学教育の役割、看護学雑誌、53(1):38-43.
- 101) 吉武香代子(1995). 看護大学における臨床実習、Quality Nursing、1(6):4-5.
- 102) 吉武香代子(1995). 看護大学における臨床実習の位置づけ、看護展望、20(5):547-550.
- 103) 吉武香代子(1996). 私学における看護教育の課題と展望—看護教育の目指すもの、看護教育、37(3):180-183.

以上70文献

### 3. 大学院教育に関する文献

- 104) C.A.Tanner(1990). 臨床実践能力の発達の過程—大学及び大学院教育の効果、看護研究、23(1):110-111.
- 105) R.de Tornyay(1990). 看護学における大学院教育への期待、看護研究、23(1):105-109.
- 106) 大井玄(1992). 東大大学院に「国際保健学専攻」がスタート—助産婦と国際協力、助産婦雑誌、12:1034-1038.

- 107) 大場正巳(1995). 北里大学大学院看護学研究科とCNS育成、Quality Nursing、1(3):20-25.
- 108) 香春知永(1995). 聖路加看護大学学部卒業生の大学院進学に関する動向調査、聖路加看護大学紀要、21:50-56.
- 109) 河口てる子(1995). 日本赤十字看護大学卒業生における自己教育と進学意識の関係、日本赤十字看護大学研究紀要、9:37-54.
- 110) 川村佐和子(1995). 東京医科歯科大学保健学科の修士課程の教育、Quality Nursing、1(3):31-39.
- 111) 小島操子(1996). 私学における看護教育の課題と展望—大学院教育の課題と展望、看護教育、37(3):188-190.
- 112) 小島操子(1996). 聖路加看護大学大学院修士課程の教育内容、看護管理、6(9):631-633.
- 113) 小木曾みよ子他(1992). 大学院における助産学教育の構想—助産修士課程の試案、看護教育、33(5):342.
- 114) 近藤潤子(1980). 看護における大学院修士課程開設の意義、看護教育、21(11):681-684.
- 115) 佐々木幾美(1995). 看護系大学教育を受けた卒業生の看護教育に対する意識調査、日本赤十字看護大学研究紀要、9:94-102.
- 116) 佐藤栄子他(1995). 看護大学院設置計画に関するマーケット調査、愛知県立看護大学紀要、1:105-110.
- 117) 島口貞夫(1990). 米国看護系大学と北里大学との交流—大学院設置に向けてUCSFとUCLA大学院および北里大学大学院、看護教育、31(1):53-59.
- 118) 杉森みど里(1991). 看護学における博士課程の必要性、看護教育、32(3):164-173.
- 119) 高橋照子(1994). 大学院教育に対する期待と不安—大学院教育を考える、現状をふまえた上で、米国から何を学ぶか、看護教育、35(11):863-865.
- 120) 田中美恵子他(1994). 看護領域における大学院修士課程修了者のキャリア開発に関する実態調査、第25回日本看護学会集録(看護管理)、150-153.
- 121) 豊沢英子(1993). アメリカ合衆国の大学院課程における看護教育—看護の修士課程教育の成立と展開(その1)、看護教育、34(1):72-77.
- 122) 豊沢英子(1993). アメリカ合衆国の大学院課程における看護教育—看護の修士課程教育の成立と展開(その2)、看護教育、34(2):152-157.
- 123) 豊沢英子(1993). アメリカ合衆国の大学院課程における看護教育—看護の博士課程教育の成立と展開(その1)、看護教育、34(3):228-233.
- 124) 豊沢英子(1993). アメリカ合衆国の大学院課程における看護教育—看護の博士課程教育の成立と展開(その2)、看護教育、34(4):310-314.
- 125) 豊沢英子(1993). アメリカ合衆国の大学院課程における看護教育—看護の大学院教育の現状と課題(その1)、看護教育、34(5):386-394.
- 126) 豊沢英子(1993). アメリカ合衆国の大学院課程における看護教育—看護の大学院教育の現状と課題(その2)—看護の修士課程及び博士課程のカリキュラム、看護教育、34(6):468-472.
- 127) 豊沢英子(1993). アメリカ合衆国の大学院課程における看護教育—看護の大学院教育の現状と課題(その3)博士課程カリキュラム実態と傾向1、看護教育、34(7):548-551.
- 128) 豊沢英子(1993). アメリカ合衆国の大学院課程における看護教育—看護の大学院教育の現状と課題(その3)博士課程カリキュラム実態と傾向2、看護教育、34(8):626-632.
- 129) 豊沢英子(1993). 看護の大学院教育の将来と展望—博士課程カリキュラムの特徴とあわせて、看護教育、34(9):709-715.
- 130) 日本看護系大学協会看護の専門分化を考える会(1993). 修士課程におけるクリニカル・ナース・スペシャリスト(CNS)育成のための教育課程試案[中間報告]、看護教育、34(8):571-587.
- 131) 林滋子(1989). 米国における大学院教育—ペンシルバニア大学とイリノイ大学シカゴ校、看護教育、30(13):846-851.
- 132) 林滋子(1989). 大学院構想に対する米国看護系大学教員の意見、看護教育、30(7):438-443.
- 133) 平山朝子(1991). わが国における看護学の大学院博士課程への期待、看護教育、32(10):604-610.
- 134) 平山朝子(1995). 千葉大学看護学部—学部教育と大学院教育による人材育成、Quality Nursing、1(3):73-85.
- 135) 南裕子(1990). 日本における大学院教育に求められるものとその背景、看護研究、23(1):112-118.
- 136) 南裕子他(1990). 看護教育はなぜ高められる必要があるのだろうか—大学院教育の必要性に焦点をあてて、看護研究、23(1):105-121.
- 137) ライダー玲子(1989). 米国における看護教育—米国



看護系大学と北里大学との交流・大学院設置に向けて、看護教育、30(11):687-693.

以上34文献

#### 4. 看護教育カリキュラムの編成に関する文献

- 138) Nancy Diekelmann(1991). アメリカにおけるカリキュラム変革の背景、看護研究、24(4):299-311.
- 139) Torres, G., Stanton, M. (1982). 近藤潤子, 小山真理子(1992). 看護教育カリキュラムその作成過程. 医学書院.
- 140) Robert, M. Gagne, Leslie J. Briggs(1983). 都留英世, 都留初恵(1994). カリキュラムと授業の構成、北大路書房.
- 141) 雄西智恵美(1988). アラバマ大学看護学部のカリキュラムと教育の実際について、千葉大学看護学部紀要、61-67.
- 142) 池川清子(1994). 大学教育の目指すものー実践基礎看護学講座の具体的展開から、看護教育、35(10):733-737.
- 143) 植村研一(1993). 看護大学教育の理念とカリキュラムー効果的医療人教育の展開、看護研究、26(7):615-620.
- 144) 柿川房子(1995). 人間を包括的にとらえる技能を養うー佐賀医科大学看護学科のカリキュラム展開、Quality Nursing、1(2):34-37.
- 145) 神郡博(1995). 人間理解と心の看護を重視ー富山医科大学歯科大学医学部看護学科カリキュラムの特徴、Quality Nursing、1(1):50-55.
- 146) 亀岡智美(1995). 看護学教育のカリキュラムに関する研究動向と今後の課題、看護教育、36(3):292-297.
- 147) 川村佐和子(1994). 大学教育の目指すものー質の高い看護実務者の養成に専念、看護教育、35(10):747-749.
- 148) 木場富貴(1995). 豊かな人間性を基本とした看護職育成をめざしてー鹿児島純心女子大看護学部の教育展開、Quality Nursing、1(2):11-15.
- 149) 小島通代(1995). 大学でなければならない看護教育、看護展望、20(5):542-546.
- 150) 河野保子(1995). 変化を起こす力を持つナースの育成ー愛媛大学医学部看護学科、Quality Nursing、1(1):28-32.
- 151) 小山真理子(1993). 看護の大学教育カリキュラムのつくり方、月刊ナーシング、3(8):58-61.
- 152) 崎原盛造(1995). 保健学専攻における看護教育の意義、Quality Nursing、1(1):45-49.
- 153) 竹尾恵子(1995). 大学における看護教育がめざすものー滋賀医科大学看護学部のカリキュラム展開、Quality Nursing、1(2):29-33.
- 154) 千葉ヒロ子(1994). 大学教育の目指すものーユニークな看護基礎科目の紹介、看護教育、35(10):741-743.
- 155) 千葉ヒロ子(1995). 専門教育を支える基礎科目をより豊かにー山形大学医学部看護学科のカリキュラム編成過程、Quality Nursing、1(2):24-28.
- 156) 常葉恵子他(1992). 米国看護学部におけるカリキュラム及び看護技術教育、聖路加看護大学紀要、3(18):54-73.
- 157) 中西睦子(1994). 大学教育の目的と理念実現のためにー陰のカリキュラムはいらない、看護教育、35(11):815-818.
- 158) 中西睦子(1995). 学士課程における看護学実習の方略論、Quality Nursing、1(2):46-52.
- 159) 服部朝子(1994). 兵庫県立看護大学開学の背景とカリキュラム構築の概要、看護教育、35(2):131-139.
- 160) 浜田悦子(1994). 大学教育の目指すものー一般教養科目を中心とした改正カリキュラムの特色から、看護教育、35(10):750-753.
- 161) 菱沼典子他(1995). さらに魅力あるカリキュラムの開発に向けて「聖路加看護大学」の教育理念と目標、Quality Nursing、1(2):38-44.
- 162) 菱沼典子他(1990). 大学における看護教育カリキュラム第1部ー聖路加看護大学カリキュラム試案の基礎、日本看護科学学会誌、10(2):49-57.
- 163) 菱沼典子他(1990). 大学における看護教育カリキュラム第2部ー聖路加看護大学カリキュラム試案の紹介、日本看護科学学会誌、10(2):58-67.
- 164) 菱沼典子他(1996). 聖路加看護大学1995年度改訂カリキュラムについて、聖路加看護大学紀要、22:113-121.
- 165) 平山朝子(1995). 千葉大学看護学部(その1)学部の概要と看護学科の教育課程、Quality Nursing、1(2)74-79
- 166) 深山智代(1995). 看護教育と福祉教育の統合をめざしてー北海道医療大学看護福祉学部看護学科カリキュラムの編成課程、Quality Nursing、1(2):21-27.
- 167) 舟島なをみ他(1996). 米国の博士論文にみる看護教育研究の現況ー質的研究の方法論に焦点をあてて、

- Quality Nursing, 2(7):814-818.
- 168) 南裕子(1994). 大学教育の目指すもの—生活実感を生かした自主的実習活動、看護教育、35(10):757-759.
- 169) 宮岡久子(1994). アメリカにおけるカリキュラム評価に関する研究の動向—方法論に焦点を当てて、埼玉医科大学短期大学看護学科紀要、5:1-8.
- 170) 宮岡久子(1996). 看護カリキュラム評価の現状と課題、Quality Nursing, 2(2):100-106.
- 171) 横田素美(1996). 大学教育においてクリニカル・ラーニングを進めるために、インターナショナル・ナーシング・レビュー、19(2):4-7.
- 172) 吉田時子(1994). 大学教育の目指すもの—隣人愛を基本とする教育、看護教育、35(10):754-756.
- 173) 山本昇(1995). 総合大学の特色を生かすカリキュラム—北里大学看護学部教育展開、Quality Nursing, 1(1):33-39.

以上36文献

## The Nursing Curriculum : Japanese Literature Review

CHIKAKO KAKEHASHI , KIMIKO TAKAHASHI and YUKIE NISHIMOTO

*Department of Nursing, Faculty of Health and Welfare Science,  
Okayama Prefectural University, 111 Kuboki, Soja-shi, Okayama 719-1197, Japan*

**Key words:** Nursing Education, Nursing Curriculum